



巻頭特集

現地語写本にみる東南

責任編集 菅原由美

東南アジアでは13世紀末頃からイスラーム化が始まった。それはゆっくりと長い時間をかけて、各地でそれ以前の文化と融合しながら進み、多様なイスラームが各地に誕生した。その多様性は、様々な文字や言葉で書かれた現地語写本にも表れている。

13世紀末、現在のインドネシア、アチェ州東海岸ロクスマウェ周辺に東南アジア最初のイスラーム王国であるサム

ドゥラ・パサイ王国が建国された。その後、15世紀にマラッカ海峡に拠点を置き、交易ネットワークの中心として最盛期を迎えたムラカ（マラッカ）王国が東南アジア海域世界にムラユ（マレー）語とともにイスラームを広める中心的役割を果たした。ムラユ語は7世紀頃より、南インド起源の文字によって記されてきたが、イスラームが広まるにつれ、アラビア文字で表記されるようになった。ジャウィと呼ばれたアラビア文字表記のムラユ語は東南アジア・イスラーム圏に広まり、スマトラ島からフィリピン南部にまで及ぶ共通のメディアとなった。一方で、東南アジア島嶼部には700を超える多



写本写真。



写本調査写真。

アジアのイスラーム化

くの言語が存在し、イスラーム化が進むと、その中からムラユ語同様、アラビア文字で表記される言語が現れた。アチェ語、ガヨ語、ミナンカバウ語、スンダ語、ジャワ語、ブギス・マカッサル語、ゴロンタロ語、テルナテ語、ウォリオ語、タウスグ語、マラナオ語、イラヌン語、マギンダナオ語、チャム語などがあり、アラビア文字表記のジャワ語はペゴン、ブギス・マカッサル語はセランと呼ばれた。また、ベトナム中南部のチャム語の場合はムラユ世界とは断絶されて発展したため、ピニ文字と呼ばれる特殊なアラビア語の文字表記が発展した。

そうした様々な言語で綴られた写本は、植民地時代に蒐集され図書館に保管されているだけでなく、今も東南アジア各地の現地社会に保管されている。これらは、西欧語史料からでは知ることができない、イスラーム化の歴史を私たちに問いかける貴重な史料である。

本特集は、2019-2021年度AA研共同利用・共同研究課題「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる宗教変容—イスラーム化過程における国家の戦略と役割」（代表：菅原由美）の研究成果の一部である。

*写真は、右下は新井和広撮影、他は筆者撮影。